鏡の世界の子どもたち

――左利きの幼児の保育をめぐって――

齋藤　薫

安野光雅は、『ふしぎなさーかす』（こどものとも184号）のエンディングとそれをうけた裏表紙とで、「ふしぎなさーかす　安野光雅さく／え」の文字を左右逆転させ、りんごにのった案内役のピエロのペペを一八〇度転換させて描いている。それは、「逆さ」ということが、神秘や魔術に結びつく「ふしぎな」ことだからにほかならない。

子どもたちが大勢あつまると、なかに「逆さ」の子どもがいるだろう。スプーンや箸、クレヨンを左手で操る、左利きの子どもである。「ふしぎな」鏡文字を書いて自らの異質性を証明してみせるより前から、彼らは一人で「逆さ」の感覚を味わっている。

もちろん、利き手が左手であることは、それ自体は何のふしぎも生みはしない。ただ、左利きでありながら右利きの人の多い社会で生活することが、子どもたちにしばしば〝自分のほかはみんな逆さ〟という奇妙な体験をさせ、あるいは、ピエロのペペに

話しかけたつもりがペペの足の下のりんごであったというようなもどかしさを覚えさせるのである。

わたしたちは以前、鏡をのぞいて、左は右で右は左であるという、ふしぎな事実に夢中になった。たとえば、右手をあげて振ってみる。すると、鏡のなかの「わたし」は左手をあげて振っている。振った右手をのばして、おそるおそる鏡をさわってみると、鏡の「わたし」の左手は、わたしの右手に触れているようにみえる。つまり、左は右で右は左なのである。

鏡のふしぎさに遊んだあとで、絵本をみるとどうだろう。たとえば、絵本のなかのだれかがスプーンをもっている。スプーンは右手に握られている。横向きでも、後向きでも、こちらを向いているときでさえ、スプーンは右手がもっている。鏡と違って、絵本では右はいつも右。ふつうのときに他の人をみるのと同じで、右はいつも右のままである。

ところが左利きの子どもの場合、鏡での発見は、そのまま絵本に引き受けられる。絵本に描かれる利き手は、ほとんどの場合右手であるから、左手でスプーンをもつ子どもには、鏡のなかの「わたし」も絵本のなかのだれかも、「左は右で右は左」の事例である。

たしかに、絵本に登場する左利きの子どもも皆無ではなくて、センダックは『あなはほるもの　おっこちるとこ』（クラウス文・センダック絵、岩波書店）のなかで、子どもたちのいく人かを左利きに描いている。大縄跳びの縄をまわす男の子、犬を抱く男の子、大きなシャベルを使う女の子、フォークをもつ男の子。また加古里子が描く『とこちゃんはどこ』（松岡享子文・加古里子絵、こどものとも）の縁日の場面にも、ふうせんやヨーヨー、わたがしやキャンディーを左手にもつ子どもがいる。

おもしろい例では、ベールマンスの『げんきなマドレーヌ』（福音館書店）の「パリの、つたの　か

らんだ　ある　ふるい　やしきに」規則正しくくらす「12にんの　おんなのこ」は、「2れつになって、はを　みがき、」の場面で洗面台にむかって右側にたつ六人は右手で、左側にたつ六人は左手で歯を磨いている。彼女たちが実は全員右利きであることは別の場面から明らかであって、ここで歯ブラシをもつ「おんなのこ」を左右に対称的に配したことは、完全に構図上の問題といってよい。このような秩序のなかで、右に対峙する左は美しいバランスを創出する。同時に『マドレーヌ』は、実際に左手で歯ブラシをもつ子どもは、規則や秩序の枠内には位置を得にくいことを象徴している。

ポケットは、とりわけ幼児にとって便利な袋である。ハンカチとちり紙のほかにも、おまじないをかけた石、きれいな葉、せみの脱け殻、何かちょっとした宝物をしまって、出したり入れたり。だから子供服には、大人の服より充分なポケットがついている。しかし、なかにはポケットがひとつだけの洋服があって、そういうとき、ポケットはきまって右側である。左利きの幼児がハンカチをポケットにしまおうとすれば、左手でハンカチをとる、右手にわたしてポケットに入れる。あるいは、左手をのばして右のポケットに入れる。当然、時間はかかるし、不本意ながらハンカチはくしゃくしゃになってしまう。

幼稚園に行く頃の幼児だれにとっても、ひとりで洋服を着脱することは一大課題だろう。〝ひとりでお洋服が着られない〟と、お泊り会にも行けないし、夏のプールでお友だちからおいてきぼりをくってしまう、と幼児は考える。なかなか深刻な問題である。反対に〝ひとりで着られれば〟、さらに〝ひとりで早くきれいに着られれば〟、途端におりこうさんといわれ、しつけの行き届いたきちんとしたお子さんとおもわれ、親にも先生にもよその大人にも

ほめられる、ということも幼児は知っている。

ところが、ズホンの前のファスナーはいつも右向きで、スカートの横のファスナーは必ず左側ではないだろうか。肩ボタンやプールの帽子のホックが左側についているのは、右手で止め外しがしやすいからである。そのため利き手が左手の場合は、不自然な向きから、あるいは近すぎるところで作業をしなければならない。

もう少し大きくなって、バッジや名札を自分で胸に付けるとき、左手主導で左胸にピンをさすのは至難の技だ。安全ピンの針が布を掬おうとしても、左胸と左手と目とが狭いところでごちゃごちゃして、自由にならない。だから、いつも名札が斜めだからといって、その子どもがへそ曲がりであったり、だらしがないわけではない。もし、名札やバッジをどちらの胸に付けてもよいのなら、話はずっと簡単だろう。

手を洗うことは、何の問題もないと思われるかもしれない。ところが、左利きの幼児は、水道の栓をしめるのに細心の注意が必要である。普通、親指以外の指は親指にむかって動く方がその逆と比べてはるかに力がはいる。うっかりすると、栓はほかの子どもが開けられないほどの固さでしまってしまう。

ときどき、大型シンクや風呂場の蛇口で、栓が横についているものがある。もちろん右横に。それでも意識しなければ、左利きの幼児は左手を出して栓をひねろうとするだろう。水を出すときには、蛇口に何かを尋ねているような姿勢になり、立ち去ったあとには、ポタポタと水がたれているかもしれない。幼児が身体をかしげて水を出そうとしている姿勢は、愛らしい。しかし、ねじれた左手で、水を上手にとめることはできないのである。

また、よそのお宅やお店でアイスクリームをいただくとき、せっかくのおしゃまであっても、左利き

の幼児はスプーンをとり落としたり、あるいは口に入れるほうを手でもってしまって小言をいわれることが多い。スプーンの柄は、きまって右側をむいて置かれているからである。左利きの幼児が左利きの大人以上に厄介なのは、「なぜ上手にできないのか」という問いかけに対して、右利き社会の不条理という答えをもたないことにある。さらに加えて、まわりの大人たちの多くが、鏡の世界のからくりに気づいていないことにある。

保育園の給食や幼稚園での食事のときの「きまりごと」は、彼らをさらに混乱させる。食事のマナーを身に付け、「ばっかり食べ」をやめるために、食器や箸・スプーン・フォークの置き場所を指定することはないだろうか。配膳の典型は、右手で箸をもつ場合を想定してできている。お友だちや先生と確認しあった配膳は、左利きの子どもには、ふしぎと食べにくい配置となっている。子どもが左手で箸を操るのをみて「ぎっちょで、ぎこちない」というのは偏見だが、本当にぎこちないのであれば、それは食器の配置と皿のなかの盛り付けを逆さにすれば解決されることかもしれない。

フォークで、ナイフの代用も出来るように片方が幅広くなっているものがある。普通は魚やお菓子を切り分けるのに活躍するが、幅広い一本はいちばん左と決まっていて、左手でフォークをもった場合は役に立たない。子どもが使う機会はあまりないが、皿のうえのやわらかいものやソースが掬いやすいように片方が平たくなっているスプーンも、左手でもつと平たいほうは上になる。

さらに、はさみはなかなかの難物である。園では、線にそって丁寧に紙を切ることが少なくない。たとえば、紙に描かれた顔の外枠の線にそって切りぬいてお面を作る。〝線にそって〟と言う意味が、線の内側か線の外側か線の上かを迷って、幼児ははじめて線の太さに気づくだろう。〝線の外側を切る

こと、お面のまわりに線が残るようにしましょう〃という、先生の指示をうけて、幼児は切る場所を確認する。〃線の外側〃。ところが、なぜか、ねらった線よりほんの少し向こう側が切れてしまう。理由は、わからない。

はさみは、まっすぐの姿勢で使うように教わっている。そのとおりに注意深くやっても、〃線の外側〃きっかりに切っているつもりでも、線の外側には細い余白がのこる。そのこどもは「上手に切れない」とため息をつくだろうし、〃よく見て、丁寧に切りましょう〃と改めてアドバイスを受けるかもしれない。

実は、左手で右利き用のはさみを持つと、はさみの刃が紙を切断するところが切り手から見えにくいのである。つまり、切り手の目に紙とはさみの接点ととらえられる点より、はさみの刃一枚分向こう側が、実際の切断点となる。幼児用の刃の厚いはさみではさみの二枚の刃の交差点を〃線の外側〃ぴったりにあわせても、目に見えてずれたところが切れるのだ。体験からこのことに気が付いた子どもは、切断点を確認しながら紙を切り進むために、約束をやぶって身体をかたむけ、刃の向こう側を覗き込みながら作業をするだろう。こうすると上手に切れる。

もしも、家庭で左利き用のはさみを使っている幼児がいたとすれば、きつねに化かされた思いがするに違いない。左利き用のはさみは、右利き用のはさみと刃のあわせ方が逆である。左利き用のはさみを左手でもって紙を切ると、はさみが紙を切る点が手前に見える。それに慣れている幼児は、園のはさみをもってみて、勝手の違いがふしぎだろう。通常、苦労なくはさみを操っているものだから、刃の向こう側を覗き込めばいいという発想もない。切っているつもりの線と実際に切れた線とのずれに愕然とするだけである。

本当なら、手は両方つかえたほうが便利だし、左利き、右利きといってこだわると、せっかくの鏡の世界のふしぎさが、身体条件の能力のようにとらえられてしまう不愉快さを伴う。しかし、「この世の中は、多数派の右利きにとって都合がいいように出来ている。ということは、少数派の左利きにとっては、具合が悪く出来ているということにほかならない。」（マルティン・ガードナー、坪井忠二・小島弘訳『自然界における左と右』紀國屋書店）というのも、真実だ。左利きの小さな人たちが、理不尽な混沌さのなかで、ふしぎな世界をおもしろがることもできずにいるとしたら、あまりに気の毒ではなかろうか。

最後に。左利きの小さな女の子は、お手洗いを汚しやすいかもしれない。彼女に必要なのはお小言ではなく、ただ、完全におわってからトイレットペーパーをとるようにというアドバイスである。洋式、和式にかかわらず、トイレットペーパーは右側についている。とくに意識をしなければ、トイレットペーパーには利き手がのびて、おしりはどうしても斜めを向いてしまうのだから。

（お茶の水女子大学大学院）